東京大学大学院　都市工学専攻
2023 年度　修士論文梗概集　　指導教員　中島直人　教授

東京内湾における祭礼の場としての水際空間の変容とその要因

The Transition of Waterfront Space as a Place of Shinto Rituals and its Factors in Tokyo's Inner Bay

37-226156　唐木田耕大

The purpose of this study is to clarify the influence of the waterfront space development plan on the interaction between Shinto rituals and waterfront space. We surveyed records of Shinto rituals in the waterfront space along the Tokyo's inner bay, and we investigated the position of the Shinto rituals in the waterfront development plan and changes in the relationship between the Shinto rituals and waterfront space for Gion-bune of Tomioka Hachimangu shrine and Taisai of Sumiyoshi shrine. The results revealed that there was the gap between the planners who try to preserve the form of the Shinto rituals in the space, and the bearers who flexibly change the Shinto rituals to ensure its continuity.

1. はじめに

1-1. 背景と目的

治水や埋立等に伴う都市－水辺関係の消失への反省から、1970 年代以降親水空間が整備されてきた。近年は「河川空間のオープン化」やウォーターフロント開発など、民間による親水整備が増加している。しかしながら都市再開発における付加価値化としての水路再生(1)、かわまちづくり計画におけるイベント・商業利用の重視(2, 3)など開発者の意向が強く、地域住民の求める親水性でない可能性がある。本研究では地域のための親水性として、水際空間[1]での民俗信仰活動に着目する。日本では歴史的に水域が聖なる空間と認識され、禊、灯篭流し、浜降りなど水際空間での民俗信仰活動は枚挙に暇がない一方で(4)、鳥取県千代川における流しびなのため緩勾配護岸(4)などの一部の例を除き、民俗信仰活動の継承のための水際空間整備の在り方は十分に議論されていない。

本研究では水との関わりが深い神社の祭礼を対象とする。水際空間での祭礼と都市との関係について、神輿渡御の巡行路などの祭礼の空間的形式およびその都市化による変遷に着目したケーススタディが数多くなされてきた。近年では、複数祭礼の比較による、水際空間の開発が祭礼に与えた影響の分析もなされている(5–7)。これらの既往研究では水際空間における都市祭礼の形式とその変化を中心に調査・分析されており、水際空間の親水整備における祭礼の位置付け、そして祭礼の働きかけによる水際空間の変化についてはほとんど明らかとなっていない。そのため本研究では都市部における水際空間の親水整備計画に着目し、祭礼－水際空間の相互関係に親水整備計画が与えた影響を明らかにすることを目的とする。なお本研究では、海水面と陸上を人が行き来する祭礼[2]を対象とする。

1-2. 研究の構成と方法

本研究の調査範囲は東京内湾（観音崎と富津崎以北の湾奥部）とした。主として高度経済成長期の開発によりほとんどが人工海岸となっている。

研究の構成を示す。親水整備の前後で祭礼が継続もしくは復活した、神奈川県横浜市の富岡八幡宮の祇園舟（2 章）、東京都中央区の住吉神社の大祭（3 章）について、親水整備計画における祭礼の位置づけと、祭礼と水際空間の変化を調査した。親水整備計画と祭礼の実態との相違から水際空間を類型化し、祭礼－水際空間の相互関係に計画が与えた影響を考察した（4 章）。

2. Case 1. ふなだまり／富岡八幡宮の祇園舟

2-1. 対象地

神奈川県横浜市金沢区の富岡八幡宮は 1191 年創建であり、祇園舟という特殊神事が創始以来継承されている。舟で沖合まで出て罪穢に見立てた茅舟（祇園舟）を流す祭礼で、横浜市の無形民俗文化財に指定されている。金沢地先埋立事業（1971 年–1988 年）により富岡八幡宮周辺の旧海岸線は消失したが、祇園舟は造成された「ふなだまり」と呼ばれる水面から川を通じて沖まで出ることによって継承された。

2-2. 親水整備計画における祭礼の位置づけ

ふなだまりは漁業補償の一環で、漁師たちの

年	親水整備
1971	埋立着手
	金沢地先埋立地内住宅地開発計画基本構想　1971〔槇総合計画事務所〕
	○ふなだまりの形が存在、親水空間として計画
1972	金沢地先埋立事業土地利用計画（第３案）公園・緑地計画説明書〔土地利用プロジェクトチーム〕
	○ふなだまりを公有水面として残す方針
1973	**ふなだまり　建設**
	○船揚場：岸壁・スリップヤード・係留水面
1977	金沢地先埋立地住宅地センター地区の商業等施設基本設計報告書〔横浜市企画調整局・大高建築設計事務所〕
	○祇園舟のスロープ
1979-	**ふなだまりの親水整備**
1981	○砂浜、参道を模した木曽石のスロープ
1995	富岡並木地区センター　開館
	○木造船の倉庫が同時に建設と推定
2017	浜へと下りる階段の整備
2020	ウッドデッキの整備
	○祇園舟のお囃子で使用

表-1　ふなだまりの親水整備

図-1　ふなだまりの計画案(10)に筆者加筆

漁船の緊急的な収容先として作られた(8)。埋立の担当者は祇園舟を認知していなかったが、埋立地の中に水面が確保され、漁船が海へと出られるように川と接続されたことから、結果として祇園舟の継続に寄与した。

ふなだまりの建設後に、祇園舟に呼応した緑地計画が作られた(表-1)。漁業補償で作られたふなだまりは、公有水面として残して公園の中で活用を図る方針となり(8)、埋立住宅地の基本構想に組み込まれた(9)。はじめて祇園舟についての記述が表れたのは『金沢地先埋立地住宅地センター地区の商業等施設基本設計報告書』であった(10)。「富岡八幡公園の中に計画されている参道をイメージした園路と海との連なりは、充分に考慮する必要がある。（中略）祭りの祇園舟を参道からくり出して、海へ舟出するというようなことがあってもよいであろう。」(p. 44)として、公園の園路をふなだまりの水面へと導く「祇園舟のスロープ」が表現された(図-1)。

祇園舟での使用が意図された園路とスロープは以降の計画に継承され、ふなだまりの親水整備（1979 年–1981 年）で水面へと下りるスロープが整備された(8)。この後現在に至るまで、水際空間の構造はほぼ維持されている。

2-3. 水際空間と祭礼の変化

祇園舟の大まかな流れは、境内での大祭式、参道から浜まで歩く、浜降神事、水面の木造船に乗り沖へと出る、である。かつての祇園舟では参道を下りた浜で浜降神事をしていたが、埋立により、漁船を泊めるために作られたふなだまりの浜へと場所を移した(図-2)。

親水整備の後、祇園舟のための設えが徐々に整備されてきた(図-2)。1995 年、造船所の跡地に地区センターが建てられたと同時に木造船の倉庫が作られたと推測される。現在の祇園舟では、木造船は倉庫から、造船所時代に作られた船の修理引揚用斜面（以下、造船所のスロープ）を通じて水面へと下ろされる。このことと、木造船を参道から水面へと直接下ろす形式でなかったことから、祇園舟のスロープは祇園舟で用いられなかった。なお「祇園舟のスロープ」の整備に富岡八幡宮側の意向は反映されていなかった。また浜へと下りる動線が無く祇園舟の際は梯子をかけて下りていたが、2017 年に神社側の要望により浜へと下りる階段が作られた。

祭礼は環境や社会の変化に合わせて柔軟に変化していた。川にかかる橋の高さが低く大潮の日にしか木造船が通れないため、毎年固定であった日程が大潮の日へと変わり、木造船二艘による沖合から浜までの競漕がふなだまり内のみへと短縮された。漁業権放棄（1971 年）により担い手が漁師から祇園舟保存会へと変わり(11)、豊漁祈願・海上安全から夏越の祓いへと強調する意味合いが変わった(12)。

3. Case 2. 隅田川堤防／住吉神社の大祭（神輿洗い、大幟）

3-1. 対象地

東京都中央区の住吉神社は 1646 年の創建で、隅田川河口の佃島に位置する。三年に一度の大祭にて、神輿を船に乗せる船渡御が行われ、また住吉神社を囲む佃堀の水中に埋められた木の柱を掘り出して 6 本の大幟が立てられる。かつての大祭では隅田川での神輿洗い（海中渡御）と船渡御が行われていたが、防潮堤整備や水質

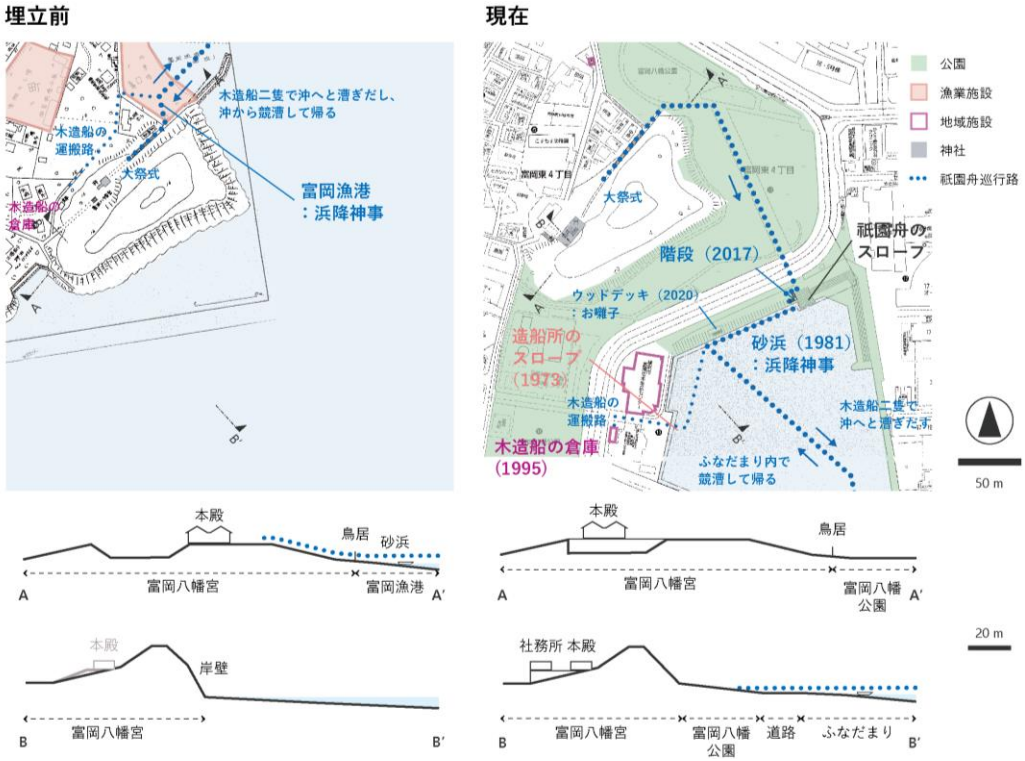

図-2　富岡八幡宮祇園舟の場としての水際空間の変化

埋立前の平面図は『金沢区明細地図 横浜市 1961 (横浜市経済地図)』、現在の平面図は『横浜市金沢区. 202211(ゼンリン住宅地図. 神奈川県)』より作成した。

汚濁のため 1962 年を最後に中止された。大川端地区特定住宅市街地総合整備促進事業（1986 年–2010 年）に伴い緩傾斜型堤防が整備されたことで、1990 年に船渡御のみ復活した。

3-2. 親水整備計画における祭礼の位置づけ

緩傾斜型堤防および公園緑地の一体的な整備計画において海中渡御を考慮した設計案が作られたが、実現しなかった(表-2)。1980 年の『大川端地区再開発基本計画』(13)では「祭り、催し事を積極的に再構築の体系にとりこむ」(p.28)と記述された。海中渡御・船渡御を反映した設計案は 3 年後の『隅田川（大川端地区）水辺の環境デザイン委託』(14)で初めて表れ、佃堀に「佃祭等のために非常に緩やかな傾斜を水面に設け、新しい住宅地までその祭が入り込める構造」(p.145)が描かれた(図-3)。しかし、さらに 3 年後に作成された『大川端・リバーパーク計画概要（案）』(15)では、水面へとつながる斜路は残された一方で海中渡御・船渡御の記述は消え、「現佃堀は埋め立て、新規に水面とお祭り広場を設けて、『復元佃堀』として再生させる」(p.56)という「江戸風空間」(p.48)の計画へと変貌した。

最終的な整備計画図(16)では、佃堀へと下りる階段護岸は整備されたが、手すりにより仕切られ水面には入れず、海中渡御・船渡御のための構造とは考えにくい。一方で「倉庫（一の部）」など大祭のための設えが表れた。

3-3. 水際空間と祭礼の変化

大祭の大まかな流れは、境内での宮神輿の宮出し、神輿渡御、隅田川で船に乗って船渡御、である。かつての大祭では鳥居をくぐり石段から隅田川へと下りていたが、防潮堤建設により隅田川と参道が分断した(図-4)。緩傾斜型堤防の計画を知った祭祀組織の住吉講により海中渡御・船渡御の復活が目指されたが(17)、川底が深くなったことを理由に(18)、隅田川沿いのテラスへと場所を変えて船渡御のみが復活した。

住吉講からの要望に応じて行政により祭礼のための設えが維持・整備された(図-4)。漁師空間であった佃堀周辺には昔から住吉講の倉庫があったため、中央区が公園整備と同時に倉庫を整備した(図-5)。大幟の柱について、かつては泥の

年	親水整備
1962	**最後の海中渡御・船渡御**
–1964	佃島に防潮堤が建設
1980	大川端地区再開発基本計画〔都市計画学会〕 ○既存文化資源として住吉神社・佃祭りを記載
1983	隅田川（大川端地区）水辺の環境デザイン委託〔東京都建設局河川部・住宅・都市整備公団・国土開発技術研究センター〕 **○海中渡御・船渡御のための水面への傾斜　の案**
1986	大川端・リバーパーク計画概要（案）〔東京都中央区〕 **○海中渡御・船渡御の記述が消失**
1989頃	緩傾斜型堤防　整備
1990	**船渡御　復活**
1996頃	祭小屋、大幟の柱・抱木を埋める枠　整備
2017	浜へと下りる階段の整備
2020	ウッドデッキの整備 ○祇園舟のお囃子で使用

表-2　隅田川・佃堀の親水整備

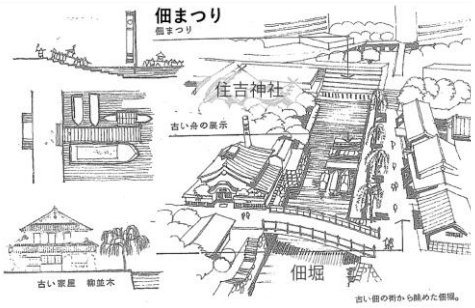

図-3　佃堀の計画案(14)に筆者加筆

中に直接埋めていたが、柱の長さや排水溝の設置などの条件を伝え、佃堀整備と合わせて柱を埋めるコンクリートの枠が整備された。

大祭は環境や社会の変化に合わせて柔軟に変容してきた。船渡御の巡行路にかかる橋の低さに対し、神輿の台を外す、台船の端に載せる、バラストタンクに注水し台船の高さを下げるなどの運び方の工夫と、巡行路自体の変更で対応していた。漁業権放棄（1962 年）のために漁業者はほとんどいなくなり、住吉講は佃島居住者から全ての人へと門戸を広げ、内部での昇級の条件も緩和されてきた。かつては海中渡御復活を願う声もあったが(19)、今はほとんど知る人がおらず、復活の要望は無いとのことだった。

4. 考察

4-1. 祭礼－水際空間に親水整備計画が与えた影響

祭礼は社会や環境などの様々な変化に対して受動的に変容してきた。富岡八幡宮祇園舟と住吉神社大祭の神輿洗いはともに参道の軸線上から他へと場を移し、水際空間の祭礼は空間的文脈より水際空間での実施を重視するという指摘(5)と一致した。また富岡八幡宮祇園舟では祭礼の目的の再定義、住吉神社大祭では海中渡御復活の要望の消失など、重視される内容が変わってきた。以上より、一年ないしは数年単位で繰り返される祭礼という「伝統」は、文字情報などの記録より、周期的な実施というプロセスにより動態的に継承される面が強いと考えられた。

祭礼の場としての水際空間（以下、祭礼－水際空間）を、親水整備計画での祭礼の位置づけの有無（計画/非計画）、整備された水際空間に対する祭礼の受容（使用/非使用）、の二軸で分類した(表-3)。水面へのアクセスの確保により副次的に祭礼で用いられるようになった（非計画×使用）水際空間を「偶有的」祭礼－水際空間と分類した。東京内湾では他にも荏原神社浜降りにおけるお台場海浜公園・寒川神社浜降りにおける千葉ポートパークの人工砂浜(7)が該当する。計画通りに祭礼で用いられた空間（計画×使用）は、祭礼を実施しながら漸次的に整備される傾向と、祭祀組織により管理される傾向があり、「場所的」[3]祭礼－水際空間と分類した。一方で祭礼での使用が計画されたが使用されないまたは実現しない空間（計画×非使用）は、祭礼の形式を空間が規定する傾向にあったことから「形式的」祭礼－水際空間と分類した。

「形式的」祭礼－水際空間が生じた親水整備計画の要因を二点考察した。一点目は祭礼の不正確な認識である。富岡八幡宮祇園舟では祇園舟のスロープは祭礼の実態との相違から用いられなかった。住吉神社大祭では漁村という地域性と関係の無い「小江戸的空間」が計画され、海中渡御・船渡御のための構造物は実現しなかった。二点目は祭礼の動態的な実態の認識不足である。富岡八幡宮祇園舟では、埋立前の参道と浜の空間構成を基に参道とふなだまりを園路で結ぶ平面計画が作られた一方で、祭礼の担い手は木造船の運びやすさから祇園舟のスロープではなく造船所のスロープを使うようになったと考えられる。住吉神社大祭では、祭礼の担い手はテラスや川の空間形状を読み取り、船渡御の復活と海上渡御の断念を判断した。以上より、親水整備計画において、過去の祭礼の形式を空間に埋め込もうとする計画者と、継続のために祭礼を柔軟に変化させる担い手との乖離が課題

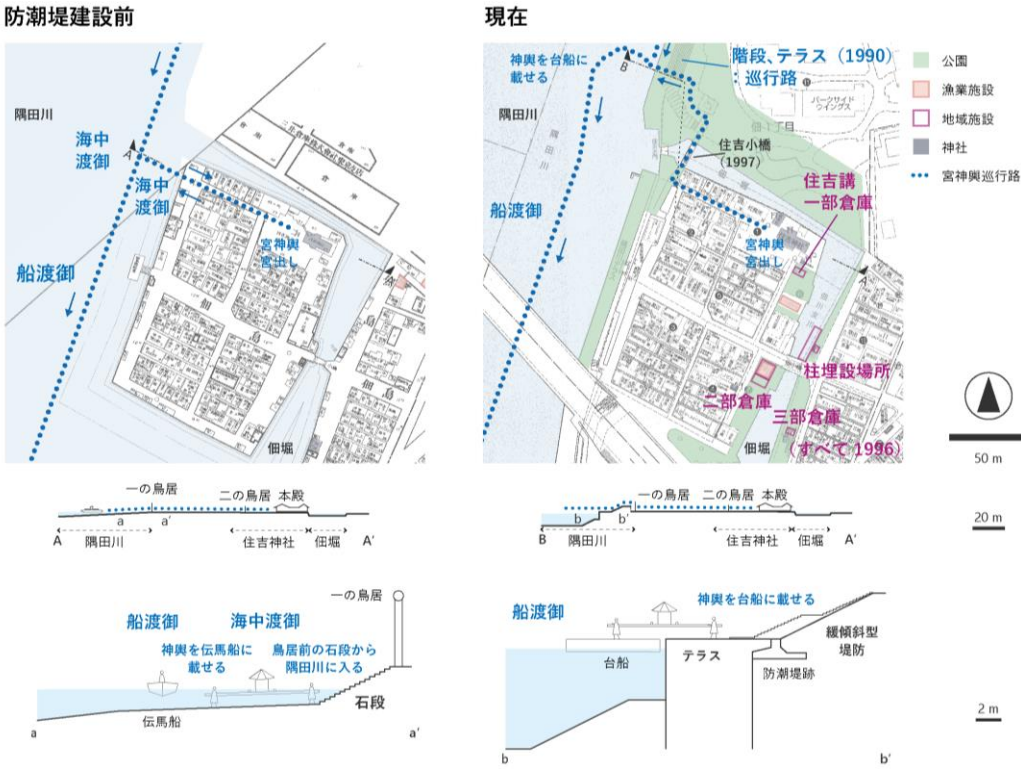

図-4　住吉神社大祭の場としての水際空間の変容

防潮堤建設前の平面図は『中央区沿革図集［月島篇］』より昭和 20 年代の火災保険図、現在の平面図は『中央区. 202301 -- ゼンリン』より作成した。

表-3　親水整備計画と水際空間の祭礼との関係

	使用	非使用
計画	**「場所的」祭礼－水際空間** 祭礼の設えが漸次的に整備・祭祀組織により管理 ・ 富岡八幡宮 祇園舟／木造船の倉庫、浜へ下りる階段 ・ 住吉神社 大祭／柱を水中に埋める枠、倉庫	**「形式的」祭礼－水際空間** 祭礼の不正確な認識・祭礼の形式を空間が規定 ・ 富岡八幡宮 祇園舟／祇園舟のスロープ ・ 住吉神社 大祭／佃堀に降りる斜路　※部分的に実現
非計画	**「偶有的」祭礼－水際空間** 水面へのアクセスが結果的に祭祀空間として機能 ・ 富岡八幡宮 祇園舟／ふなだまりの浜、造船所のスロープ ・ 住吉神社 大祭／緩傾斜型堤防、親水テラス	（一般的な水際空間）

であると考えられた。ただし今回のケーススタディは、まちづくりにおける住民参加が一般的でなかった 1970–80 年代という時代背景、政教分離のため行政の計画に神社を位置付けにくい点(20, 21)に留意する必要がある。

一方で、祭礼が環境・社会の変化に柔軟に対応するからこそ水際空間の変化が意図せず祭礼の地域固有性を喪失させる可能性も確認された。二つのケーススタディでは、祭礼の歴史と比して短い期間での水際空間の変化が祭礼を根本的に変容させていた。

4-2. 結論

東京内湾における水際空間での祭礼について、多くが途絶したが、一部は環境・社会の変化を受容し継続を自己目的化しながら動態的に継承されてきたことを明らかにした。また親水整備

計画は、水面へのアクセスにより祭礼の場としてのアフォーダンスが生じる「偶有的」、祭礼に必要な設えが漸次的に整備され祭祀組織により維持される「場所的」、祭礼の形式を空間的に規定した結果祭礼で用いられない「形式的」の三種の祭礼－水際空間を生じさせたことを明らかにした。

祭礼を考慮した水際空間整備では、祭礼を不可逆的に変質させる可能性に自覚的であること、空間だけでなく祭礼の担い手の「体験志向」(1)のオーセンティシティを読み解くことが求められる。具体的には、水面へのアクセス、地域の人々が使い方を見出す余地、地域の人々によって維持管理される空間が重要であり、これらは祭礼を通じた場所の記憶の媒体とも捉えられる。他のウォーターフロントでの今回の知見についての検証は今後の課題としたい。

【補注】

(1) 「水際線とそれに接する空間」と定義した。

(2) 本研究ではこれらの祭礼のうち、本研究で神輿を船に乗せて水面を渡ることを「船渡御」、神輿を担いだ人が海に歩いて入ることを「海中渡御」と呼ぶ。

(3) 場所(place)を「歴史、記憶、物語、愛着、アイデンティティなどが埋め込まれた環境」(22)の意味で用いた。

【参考文献】

(1) 内田奈芳美. 都市のオーセンティシティのゆらぎと解釈. 地域経済学研究. 2020, vol. 38, p. 17–26.

(2) 坂巻哲, 土肥博, 大島一夫, 竹下圭悟. 計画段階における「かわまちづくり」の親水機能に関する一考察. 都市計画報告集. 2023, vol. 22, no. 1, p. 29–33.

(3) 角谷瑠偉, 丹羽由佳理, 横田樹広. 河川とまちの融合を目指した「かわまちづくり」の施策分析. 日本建築学会技術報告集. 2020, vol. 26, no. 64, p. 1161–1166.

(4) 松浦茂樹, 島谷幸宏. 水辺空間の魅力と創造. 1, 東京, 鹿島出版会, 1987, ISBN4-306-07160-X. https://cir.nii.ac.jp/crid/1130000796199172992, (参照 2023-12-05).

(5) 北島彩子, 川原晋, 岡村祐, 伊藤正太, 山本大地. 海岸・河岸の整備と水辺型祝祭再生のための市民による取り組み：人の活動舞台としての公共空間形成と担い手形成に資する都市祝祭空間論(4). 日本建築学会大会学術講演梗概集. 2013, p. 377–378.

(6) 園佳美, 斎尾直子. 漁村における水辺巡行型祭礼と浜・港空間の機能多様化実態. 日本建築学会大会学術講演梗概集. 2018, p. 11–12.

(7) 園佳美, 斎尾直子. 水辺巡行型祭礼と神社・町・水辺の空間構成の変遷. 日本建築学会大会学術講演梗概集. 2015, p. 73–74.

(8) 金沢地先埋立事業史. 横浜市, 横浜市港湾局臨海事業部, 1998, 388p.

(9) 金沢地先埋立地内住宅地開発計画基本構想１９７１. 1971.

(10) 横浜市企画調整局, 大高建築設計事務所. 金沢地先埋立地住宅地センター地区の商業等施設基本設計報告書. 1977, 105p.

(11) 城所恵子. 民俗芸能・民俗行事への行政の対応--神奈川県横浜市の場合. 民俗芸能研究. 1998, no. 27, p. 85～88.

(12) 朝日則安, 小平美香, 服部匡記, 石川正人, 小野和伸, 佐野主水, 柴沼淑人, 金子善光. シンポジウム 神社祭祀の現状と課題. 儀礼文化. 1998, no. 24, p. 61～81.

(13) 社団法人　日本都市計画学会. 大川端再開発基本計画　都市再開発基本計画策定調査報告書. 1980.

(14) 東京都建設局河川部, 住宅・都市整備公団, (財)国土開発技術研究センター. 隅田川（大川端地区）水辺の環境デザイン委託報告書. 1983.

(15) 東京都中央区. 大川端・リバーパーク計画概要（案）. 1986.

(16) 藤原宣夫. 都市に水辺をつくる：環境資源としての水辺計画. 技術書院, 1999, 232p., ISBN4-7654-3162-2.

(17) 朝日新聞. （３９）佃祭り　陰徳積もうと女抱きとめたが　何とか神輿洗い復活させたい実家への帰り命を救われ大恩__東京　落語地図. 1987.

(18) 朝日新聞. 船渡御　再開発が渡りに船（佃夏祭考：４）東京. 1990. https://xsearch.asahi.com/kiji/detail/?1705374652505, (参照 2024-01-16).

(19) 朝日新聞. （７）佃祭り＜２＞姿変われど心は「昔」に__下町. 1977.

(20) 築田良, 木下光. 計画都市における墓地と宗教施設に関する研究. 日本建築学会計画系論文集. 2014, vol. 79, no. 703, p. 1945–1953.

(21) 高原柚. 多摩ニュータウンにおける宗教施設の新設・活用計画に関する研究. 日本建築学会計画系論文集. 2022, vol. 87, no. 799, p. 1820–1831.

(22) 河合洋尚. 景観人類学入門. 風響社, 2020, 13–21p., ISBN978-4-89489-281-1. https://ci.nii.ac.jp/ncid/BC02142966, (参照 2024-01-25).